

法然仏教の人間観研究

——これまでの動向と課題——

【抄録】

本研究は、特に法然仏教の人間観というテーマに絞り、これまで収集した研究論文を整理して、そこから読みとれる動向と今後の課題について考察した。法然の人間観に関する研究は次のように分類できる。

- ① 教学基盤として人間観を論じる立場
 - a 通仏教的背景から論じるもの
 - b 仏教思想史・浄土教思想史的研究
 - c 実存的人間観研究
- ② 浄土教信仰・思想の中に人間観を捉えるもの
- ③ 全体にわたるもの

市川定敬

ただし、これは一応の分類であって、必ずしも互いに干渉しないというものではない。

今回収集した中で、峰島旭雄氏の「浄土教の人間観」(『佛教論叢』第十一号、一九六六)はそれ以前の研究を収集した成果であり、一つの基準とみなすことが出来る。この研究は、善導法然の浄土教の人間観においては人間一般について考えるものではない、また、悪人正機における善悪は普通(日常)の善悪を指すのではないという二点を指摘するが、他の研究を概観するとこの点に関する見解は一致せず、むしろさらなる議論が必要であることがわかるのである。

キーワード…法然仏教、人間観、善悪、悪人正機

はじめに

法然上人八百年遠忌特別プロジェクトは、その一環として「法然仏敎思想の研究史とその傾向」という課題に取り組んでいる。今回は、特に法然仏敎の人間観というテーマに絞り、これまで収集した研究論文を整理して、そこから読みとれる動向と今後の課題について考察してみたい。

法然の浄土敎は、『逆修説法』一七日に明言されるように、「唯だ此の正宗のみ機と敎と相應せる法門」（『昭法全』二三六頁）と強調されるものであり、その意味で単に「機」であるところの人間観のみを扱う研究に限らず、その敎義ないしは思想を研究する限り何らかのかたちでその人間観の考察と無縁であることは出来ないと言うことができ、またそこに人間観研究の重要性も指摘されうる。よって、法然の敎義・思想に対するすべての註釈書および論文が本研究作業の対象となりうる訳であるが、今回は特に人間観を主題とする論文に絞って収集・整理を行なっている。

現時点で、収集した論文を発表年順に並べると次の通りである。

石井敎道「第三章 衆生論 第一節 浄土行者の資格と其種

類

藤原了然「選択集に於ける凡夫論」
（『浄土の敎義と其敎団』、一九二九年）

坪井俊映「浄土敎に於ける凡夫性について」
（『日本仏敎学会年報』第十六号、一九五一年）

西川知雄「印度学仏敎学研究」通卷三、一九五三年
西川知雄「法然の人間観」
（『法然浄土敎の哲学的解明』、初出一九五五年）

「法然上人の人間観」
（『法然浄土敎の哲学的解明』、初出一九五六年）

千賀眞順「法然上人の人間観」
（『印度学仏敎学研究』通卷十八、一九六一年）

西川知雄「浄土敎における『罪人』について―法然の場合―」
（『法然浄土敎の哲学的解明』、初出一九六一年）

香月乗光「法然上人の浄土開宗における仏敎の転換」
（『法然浄土敎の思想と歴史』、一九六三年）

諸戸素純「出発点としての人間観 ―弱く無力であるとの自覚―」

（『法然上人の現代的理解』浄土シリーズ1、一九六四年）

恵谷隆戒「日本浄土敎思想史上における凡夫性自覚過程について」

〔佛教文化研究〕第十三号、一九六六年
峰島旭雄「浄土教の人間観」

〔佛教論叢〕第十一号、一九六六年
高橋弘次「法然の人間観——特に「瓦礫變成金」について——」

〔印度学仏教学研究〕通卷二九、一九六六年
坪井俊映「法然浄土教における人間悪について」

〔日本佛教学会年報〕第二三三号、一九六八年
奈良博順「鎌倉仏教における人間観の相克——興福寺奏状」をめぐって——

〔淑徳大学研究紀要〕第三号、一九六九年
清水 澄「法然上人とマルチン・ルター——人間観について——」

〔浄土宗開創期の研究〕香月乗光編、一九七〇年
大北裕生「法然上人の人間観」(第二刷)

〔人文学論集〕第五号、一九七一年
清水 澄「法然上人の人間観——護教論的試論——」

〔浄土宗開宗八百年記念 法然上人研究〕、一九七五年
結城令聞「浄土教の人間論」

〔講座仏教思想 第四卷「人間論・心理学」〕所収、一九七五年

清水 澄「法然上人の人間観——歎喜踊躍の心をめぐって——」
〔法然仏教の研究〕、一九七五年
菊藤明道「法然上人の人間観——特にその罪悪性について——」

〔印度学仏教学研究〕通卷四七、一九七五年
高橋弘次「浄土教の人間観——とくに人間の呼称をめぐって——」
〔人文学論集〕第十号、一九七六年

服部正穩「第三章 人間観」
藤堂恭俊「三学非器の自覚」
〔法然浄土教思想〕、一九八〇年

〔法然上人研究〕一、一九八三年
藤堂恭俊「最終講義 浄土教思想の特徴——人間観を手がかりとして——」

〔佛教大学仏教学会紀要〕第二号、一九九四年
藤本浄彦「法然における浄土教的存在論の形成」
〔宗教的人間観の形成〕

〔法然浄土教の宗教思想〕所収、二〇〇三年

ところで、分類・整理に入る前に、峰島旭雄氏の論文「浄土教の人間観」〔佛教論叢〕第十一号、一九六六)に注目したい。これは浄土宗教学院での「選択集の総合的研究」の一部門として、浄土教の人間観についてのそれまでの研究成果の上に提示

されたものであり、先行研究を省みる上での一つの基準となるべきものだからである。

峰島氏は『選択集』に引用される善導の『観経疏』の文「決定して深く信ず、自身は現にこれ罪悪生死の凡夫、曠劫よりこのかた常に没在し流転して出離の縁あることなし」を指して、浄土教の人間観は善導・法然において凡夫観として確立したとする。そして、仏教における人間観を①構成的人間観（五蘊仮和合の人間観）、②観念的人間観（空（および唯識）の人間観）、③主体的人間観（浄土門的「行」の人間観）と押さえ、特に③を「深い内省と社会現実に対する鋭い批判に基づく主体的人間把握」であるとし、これを浄土教の人間観の特異性として指摘している。また、西洋の人間観・人間論・人間学の客観的態度、すなわち *homo sapiens*（理性人）、*homo faber*（工作人）、実存的人間、現象的人間等の解釈に対しても異なるものであるとする。つまり、浄土教の人間観は西洋のそれとも、また仏教内においても全く特徴的なものであると位置づけている。

そして、このような浄土教の人間観から引き出される問題として、こうした人間観においては、「自己自身の人間把握を通して人間一般をも考えるのか、それとも、考えるのは自己自身の救済のみであって、それは人間一般にまで拡大されなくても

よいとされるのか」ということと、これに関連して浄土教における人間観と救済論の相即、すなわち信機・信法の相即関係を指摘する。特に前者に対しては、「善導大師・法然上人の最大関心事は人間そのものをつかむことであって、決して人間一般のあり方や本質を規定する人間観の樹立にあつたのではないということ、明らかである」と断言する。

また、後者に対しては、浄土教においては、人間の本質規定がなされた上で救済論が開示されるのではなく、「救われるべき人間はいかなる人間であるか」が問題とされるという点を指摘し、悪人正機の問題に触れている。この問題に関しては、それまでの研究に対する分析から善悪の概念に三種類、すなわち 1 一般的社会的倫理的通念としての善（悪）、2 自力的仏教修業における戒善（悪）、3 他力の中の自力的修善（悪）、の系統において論じられているとし、「善人正機・悪人正機における善悪はふつうの意味ではなく、宗教的な、しかも浄土教にして他力の中の他力の次元において言われるものと思われる」とする。

先行研究を省みていく上での基準として峰島氏の論文を挙げたのであるが、我々がここから顧慮すべき点として二つの疑問を挙げることができる。一つは、峰島氏の論文が善導法然の浄

土教の人間観においては人間一般について考えるものではないとしているが、果たしてそう言い切れるだろうかという点。もう一つは、悪人正機の問題について、ここでの善悪は普通（日常）の善悪を指すのではないという点である。前者については、法然遺文において詳細な凡夫概念の規定が見当たらないという点からも一見首肯できそうな意見であるが、これを肯定した場合、法然が立教開宗を宣言し、布教活動をしたことの意味が理解しがたくなる。また、人間一般に当てはまらない思考を持つ浄土教は倫理性を有しないということになりうるのではないか。後者については、善悪の概念を普通日常的な意味から切り離して、宗教という領域における特有の意味を持つ概念として扱うことは、浄土教を非日常的な閉ざされた領域に隔離することになってしまう。つまり、浄土教で語られる言語は、普通に日常生活を営む人間にとつては意味をなさないものとなるのである。この点もやはり浄土教の倫理性の有意義性への疑問となる。このような問題点を意識しながら、法然浄土教の人間観についての先行研究を見ていきたい。

ところで、先にあげた論文を概観すると、年代別の特徴、つまり時代による傾向の変遷といったことよりも、それぞれの研究者の関心と方法論による傾向性が見られる。すなわち、①法

然の浄土教義の教学基盤として人間観を論じる立場、②浄土教信仰のただ中に浮き彫りにされる人間を語るもの、③そしてこの両者にわたるものの三類である。また、①においては、a 通仏教的な知識を背景にアプローチするものと、b 浄土教思想史的に法然の位置づけを明らかにしようとするもの、また超時間的、人間の普遍的問題として論じる c 実存的立場が見られる。次のようにまとめられる。

① 教学基盤として人間観を論じる立場

a 通仏教的背景から論じるもの

b 仏教思想史・浄土教思想史的研究

c 実存的人間観研究

② 浄土教信仰・思想の中に人間観を捉えるもの

③ 全体にわたるもの

ただし、これらの分類は、必ずしも互いに干渉しないというようなものではない。

① 教学基盤として人間観を論じる立場

a 通仏教的背景から論じるもの

まず、通仏教的な視点を意識しつつ、法然浄土教の人間観をその教学基盤として捉えるものに、藤原了然氏の「選択集に於

ける凡夫論」（『日本仏敎学会年報』第十六号、一九五二）を挙げることができる。藤原氏はまず法然仏敎の主張する「凡人居士」が、大因大果、小因小果の通仏敎的因果律に矛盾するという問題を指摘する。これに対し、浄土仏敎の理論として二種深信などが見られるが、通仏敎的立場から理解するならば、日本浄土敎の立場は「事の法門」に立つものであって、聖道門の「理の法門」においては仏凡の断絶は動かし難いが、事の法門の立場から見れば、具体的に実在するのは凡夫のみであり、その凡夫といえども独立個在するのではなく（空）法性真如の中の実在であって、この在り方は説明を越え言語の彼岸に属する在り方であるので、凡人居士には非難されるような問題はないとする。そして、「理の立場より一見、曲解され仏敎常説より逸脱したかの観を呈する選択集の凡夫観は、その能表現たる事の立場よりするならば、仏敎諸説中に於ける最も代表的なしかも最も現実的なものの一つである」と通仏敎思想に対して浄土敎を位置づけている。

通仏敎的知識から浄土敎の人間論にアプローチするものにも一つ、結城令聞氏の「浄土敎の人間論」（講座仏敎思想 第四卷「人間論・心理学」所収、一九七五）を挙げることができる。結城氏は、親鸞における「人間に対する歎き」を具体的

に例示し、それらにみられる仏敎用語に着目し、『唯識三十頌』『百法明門論』『成唯識論』から仏敎の煩惱論を解説する（a本惑的構造（根本煩惱）⇨俱生分別門・自類相応門・識相応門。b随惑的構造（随煩惱）⇨仮実分別門・俱生分別門・自類相応門・識相応門。c本随両惑の相応関係（本惑相応門））。特に、「識相応門」の解説では、「浄土敎の煩惱具足、煩惱成就ということがただ罪悪感というような主観的なものでなく、人間構造として把握できる」とし、前五識・第六識・第七識・第八識と貪・瞋・痴・慢・疑・身見・辺等の四見、との相応を図示し、人間が煩惱的構造であることを明らかにしている。

これら二論文は、藤原氏が「事」と「理」という枠組みから凡夫論を説明しようとし、結城氏が仏敎の分析的煩惱論を前提として浄土敎の人間論とその問題を論究するという意味で、通仏敎的背景からの人間観研究であると分類できる。次に、仏敎思想史あるいは浄土敎思想史から法然の人間観を位置づけようとする研究について見てゆきたい。

b 仏敎思想史的・浄土敎思想史的研究

千賀眞順氏の「法然上人の人間観」（『印度学仏敎学研究』通卷十八、一九六一）は、法然の人間観である凡夫性は、浄土三部経に基づき、浄土祖師を一貫する伝承であることを龍樹を始

点として、天親、曇鸞、道綽、善導と法然に至るまで概観する。そしてこれら諸師の人間観を指摘した上で、『選択集』に述べられる「有仏性」を、「涅槃大乘の基本線は飽くまで現実を無視した理想論であり、可能性を以て修道を勧奨したものであるに過ぎず、「人間の現実性に徹したところに法然上人の人間観はある」と結論する。

恵谷隆戒氏の「日本浄土教思想史上における凡夫性自覚過程について」(『佛教文化研究』第十三号、一九六六)は、法然に至るまでの日本浄土教における人間理解をたどるものであり、聖徳太子にはじまり、智光・最澄・円仁・源信・静照・禪瑜・源隆國・永観・珍海を挙げ、法然に至る人間観の深化を分析するものである。

高橋弘次氏の「浄土教の人間観——とくに人間の呼称をめぐる——」(『人文学論集』第十号、一九七六)は、仏教思想史における人間の呼称の変化に着目することによって、浄土教思想が人間を「凡夫」と呼称するにいたる思想的過程の一面を明らかにしようとするものである。その考察は、パーリ・サンスクリット文献における人間の呼称、“*manuṣya* (*manussa*)”、“*satta* (*satta*)”、“*prthag-jana* (*puṭhujjana*)”の語意から始まり、中国・

日本の浄土教において用いられる凡夫の語へと至り、法然において「はじめて浄土教(念仏の教え)における主体的な自己の確立が見られる」とし、浄土教の人間観の主体的な深まりの歴史的過程を論述するものである。

奈良博順氏の、「鎌倉仏教における人間観の相克——興福寺奏状」をめぐる——」(『淑徳大学研究紀要』第三号、一九六九)は、復興運動を繰り広げたにもかかわらず旧仏教が大方室町時代までに消滅した原因の究明を問題設定として、貞慶と法然における人間観の相違を論ずるものである。特に両者の時代的背景に着目し、貞慶の人間観が貴族社会の枠を出るものではなかったのに対して、法然のそれは社会的身分を超えた時代的苦悩を背景としたものであるとする。

以上、見てきた思想史的観点の先行研究によれば、インドからの、あるいは日本の浄土教の流れは、善導の思想を継承する法然において人間観の捉え方が大きく転換しているということが共通して指摘されるところである。こうした点に関して、人間観を主眼とするのではないものの、香月乗光氏の論が注目される。

香月乗光氏の「法然上人の浄土開宗における仏教の転換」〔法然浄土教の思想と歴史〕所収、一九六三〕は、法然の浄土宗開宗を仏教の転換であったとし、この転換の内実を「捨聖帰浄における転換」「捨雜帰正における転換」「専修一行における転換」の三点において押さえるのであるが、これらに一貫して言えることは、「法による仏教」から「仏による仏教」への転換であるという。また、この転換は浄土教の歴史の流れにも見ることができ、源信・永観の浄土教が観想・三昧を目的とするのに対して、法然の浄土教は本願の行である称名による往生を求めるものへの転換であったことを指摘している。こうした仏教の転換の契機に、「内的契機」として法然の『三学非器の告白』、そして「外的契機」として当時の仏教界の哲学的傾向と、末意識を挙げる。つまり、法然による仏教の転換の根底には、その人間観、自己の三学非器の自覚、凡夫の把握が横たわっていると見ることができるのである。

藤堂恭俊氏の「三学非器の自覚」〔法然上人研究〕一、第一章「浄土宗開創期前後における法然の課題」第四節、一九八三〕は、源信の『往生要集』から法然という浄土教の移行について、特に凡夫観に着目するものである。藤堂氏はまず『往生要集』に見られる凡夫観に関わる表現を抽出、分析して

源信における凡夫の内実について考察する。そして『往生要集』が称名を説きながらも、依然として称名に対する観行の優位や、菩提心・持戒といったことから離れ得ないことを指摘し、源信は、凡夫を注視しつつも、未だ既存の仏道を脱していないとする。対して法然においては、弁長が伝承する『三学非器』の告白について考察がなされ、これは法然自身の三学の深まりの体験に立脚するもので、「菩薩の実践として三学のあるべき状態と、実際に三学を実修しつつある現状とのへだたり、三学の全うをさえぎり、さまたげるものの発見であった」とし、この発見されたものを「人間の性」であったといい、法然の浄土開宗はこの人間の性である「三学非器の自覚の上にたった仏教の見直しであった」と結論する。

また、この論文において藤堂氏は二種深信における信機に言及し、「信機において自覚される人間の性とは、同じ性でも菩薩の実践上と、阿弥陀仏の光明に照らし出されるといふ宗教経験上とにおける相違を看過し得ないから、三学非器と区別されるべきである」と、信機と三学非器の質的相違を指摘している点注目される点である。

同藤堂氏の最終講義「浄土教思想の特徴―人間観を手がかりとして―」〔佛教大学仏教学会紀要〕第二号、一九九四〕は、

曇鸞の浄土教思想を中心とした思想史的立場に立つものであり、法然のそれが主題として論じられるものではなく、また浄土教における人間把握の内実を論究することを目的とするものでもないが、人間観を基盤として浄土教を理解しようとするものとして学ぶべき所の多い論文である。

藤堂氏の論は、「人は生まれながらにして結使・煩惱を、人間の性として一律平等に具有している」ということを前提として置くもので、浄土教においては曇鸞の『往生論註』に言われるところの「信仏の因縁」の法によって、この煩惱的存在である人間の仏道の成就が可能に成るといふ。そして、「浄土」「念佛」といったことに考察を加え、いずれも人間の本性的な認識である「我」と「汝」という認識論を否定しないということを確認する。さらに、そのことを善導の『観経疏』玄義分に示される「三縁義」における「仏凡二重の人格的呼応関係」を称名念佛の内実として解明している。この最終講義は、浄土教における人間観、凡夫の解明ではなく、凡夫を前提とした、凡夫のための教えとしての浄土教を論じるものであるが、この論で前提とされる凡夫観は、「我」と「汝」という人間の日常的認識の基礎をなすものであり、また身口意の三業という身体性によって、仏と凡夫が捉えられるという点で注目されなければならない。

c 実存的人間観研究

次に、法然浄土教の人間観を実存的な関心から研究するものを見ていく。これは、通仏教的知識を基礎に浄土教の人間観の位置づけを試みるものや、法然浄土教にいたる思想史を省みて概念変化を分析し、その位置づけを試みるものとは異なり、法然浄土教における凡夫の内実を哲学的・実存的に考究するものであり、またそこには研究者自身において人間をいかに見るかという主体的関心と相即する性質をもつ研究であるということがいえるだろう。

坪井俊映氏の「浄土教に於ける凡夫性について」（『印度学仏教学研究』通巻三、一九五三）は、その考察の方法論から通仏教的背景から論じるものに分類されるべきかもしれない。しかしながら、坪井氏の結論において強調されることを注目するならば、実存的な研究であるといえる。坪井氏はまず、凡夫の原語である *prthag-jana* への着目から、聖道諸教の説く凡夫が客観的にとらえられるものとし、対する善導や法然の説く凡夫は主体的自覚において語られるものであるという。また、浄土仏教における凡夫が煩惱肯定になる傾向に対して「浄土教の凡夫とは、かかる安易な「自堕落」「物知らず」を自負するものを云うのではなく、罪悪観による厳粛な自己否定を媒介とせる

凡夫であつて、直接肯定的なものではない」と浄土教の凡夫観の深刻な一面を指摘している。

西川知雄氏は、坪井氏の指摘する「浄土教の凡夫観の深刻な一面」と真摯に格闘した研究者であるといえるだろう。ここでは、『法然浄土教の哲学的解明』に収められる「法然の人間観」（一九五五）、「法然上人の人間観」（一九五六）、「浄土教における『罪人』について―法然の場合―」（一九六一）を取り上げたい。

「法然の人間観」では法然浄土教の出発点として検討されるべき問題として人間の機根が指摘される。まず法然の時代的背景である末法が挙げられるが、これは「絶望の壁に突き当たらない」という。すなわち、キルケゴールといったヨーロッパ的な思考では、「人間的なるものの全面的否定（絶望）によって救いが成立」つものに対して、「法然に於いては人間的なるものの全面的否定は救済のはたきのうちにて於いて仏の力によってなされる」というのである。また、法然における「悪人」の意味について「法然は世間の道徳に於ける悪と同意に解している」とし、その重要性を強調する。そしてこの悪人である人間が、「無明のまま」「人間のまま」でどのように救済されるのかについては、信心においてそれが可能になるという。この信に

よる救済は論理的には矛盾であるが、そこに着目して、法然の人間観は、「人間とは無明であり、且つ論理の裂け目に於て生きていくものである」と結論する。

同氏の「法然上人の人間観」は、極めて主体的なまなざしから、いわば人間学的な方向において法然の人間観を語り出そうとするものであつて、先の論文でいわれた「論理の裂け目」を解明しようとする営みであつたと位置づけられるかもしれない。

この論文は、まず自己意識の限界点、つまり「人間であることのできるぎりぎりの一線」として、罪意識において人間には自己を客体化し、客体化される自己に罪を被せるという自己欺瞞が在ると指摘する。そしてその自己欺瞞の意識に追いつめられた人間の救いは「学の次元に於てではなく宗教の次元に於て実現されるのでなければならない」のだという。

次に西川氏は、「わが身をふりかえつて」として、右の自己意識の限界点をみずから主体的かつ峻厳に内省し、本願に救われる自己は自己を否定しながら、その否定される自己を引き受けなければならぬという。このような自身の内省を経て、西川氏は法然上人の浄土教は「自己の発見」「自己の確立」を新しい形で思想界に持ち出したものである」といい、この「自己の発見」とは「自己は罪惡の凡夫である」ことの発見であり、

「自己の確立」とは「自力によつては救われることができないもの、それこそまさに自己なのだ」と規定したことだという。そして、「自己とは自力によつて救われないもの」という一見矛盾な規定は、人間存在の根本に触れるところ、すなわち「人間であつて人間であることができなくなるぎりぎりの線に於ける人間」観であり、「自己」を肯定しつつ「自力」を否定すること、換言すれば、「人間」を肯定しつつ「人間の善業」を否定することに於て、法然の浄土教の特質であり、その人間観がある」と法然浄土教の特質と、その人間観を明確化する。

また、西川氏は仏教の根本問題である「苦」が「罪」の人間観へと変異していったのではないかと推察し、このことが冷厳な哲理としての仏教から、慈悲による救済の宗教への変移に並行しているとし、法然の人間観を「人間は「罪人」として存在している」と論じている。

先にあげた香月氏の論文は、法然の浄土教に見られる「法による仏教」から「仏による仏教」の転換においては、その内的契機として三学非器の自覚、外的契機として当時の仏教界の哲学的傾倒が指摘されたが、今見た西川氏の論文は、香月氏が外的契機とするもののうちに内面性、つまり主体的人間観を指摘するものであるといえるだろう。

同西川氏の「浄土教における『罪人』について——法然の場合——」は、先の論文で指摘した法然の人間観である「罪人」について、法然遺文から、「仏戒に違するもの。破戒」「煩惱」「妄念」「無智」「愚癡」「懈怠」「不信」「輕慢」「謗法」の表現を抽出し考察を加える。そして、とくに「罪悪生死の凡夫」の表現に見られるように、人間が人間として在る限り離れ得ない「罪人」という性質に論究するのであるが、同時に法然には仏性を有する人間観を認める面もあることを指摘し、「元来、法然にあつては、「善人」「悪人」は、仏が判別することであつて、人間が自ら勘計することではなく、人が救われるのは、善・悪によつてではなく念仏の一行によつてであると法然の浄土教の本旨を押さえるのである。

諸戸素順氏の『法然上人の現代的理解』（浄土シリーズ一、一九六四）は、一般向けの書であり論文ではないが、特に第三章の「出发点としての人間観——弱く無力であるとの自覚——」という章題が示すように、法然浄土教の教学基盤としてその人間観に着目するものであり見逃されてはならないものである。

諸戸氏は、「人間性の追求とそこに現れた問題の解決こそが、上人の教えの基調をなしている」と法然の人間観の重要性を述べ、特にそれを伝統的な仏教では人間における（さとり）可

能性が前提となっていたのに対し、法然においては不可能性が前提とされることとなったとし、法然が所依とした善導の『観経疏』散善義の、「決定深信自身現是罪惡生死凡夫曠劫已來常沒常流転無有出離之縁」の文にその根幹が見られるという。

同書第四章「凡人の宗教」では、宗教学的視点から凡人の宗教としての法然浄土教が解説されるが、このなかでは「凡人」が、「凡人の」「凡」とは非宗教的ということを意味し（略）宗教学でいう「聖」に対する「俗」が、そこで考えられている（略）聖に生きるためには凡に死なねばならない」と規定され、さらに、聖が法身仏や涅槃に見られるような、超越的普遍的性質を持つのに対して、凡人の在り方が「具体的であり、現実的であり、個別的であることにこだわる」（具象性）という特性が指摘される。

このように法然の人間観である凡人（凡夫）を捉え、それを基盤として法然が探し求めた「凡人の宗教の条件」を「仏として、本来超越的でありつつ、しかも現実実に実在し、普遍的でありつつ、しかも個別的な仏、智慧とともに慈悲の仏が実在していることを信じて、その絶対的な力の救いに与るのは他はない」と押さえるのである。

坪井俊映氏の「法然浄土教における人間悪について」（『日本

佛教学会年報』第三十三号、一九六八）は、法然浄土教における人間を考える上で、「仏との関係において見られる人間」と「社会を構成する一員としての人間」という二分法を提示する。そして、前者に属する要素として「現実の人間は全て末法五濁悪世に住する下根下智であり、六道に輪廻して出離の縁無き常没の凡夫と見る立場であって、この立場にては一切の聖者善人の存在を認めず、全ての人間は悪人」とあるという。これは末法思想と六道輪廻思想を根拠とする客観的なものとされる。また、主体的なものとして「末法悪世にありて常没の衆生は私であると自己自身の生死流転を内省する人間」を指摘する。また、「社会を構成する一員としての人間」の問題として「戒法孝養等」について、これは「教団秩序を維持」および「人間相互の人倫関係を規定するもの」として、「社会人として現実社会に生きている以上当然守らなければならない」として法然においては語られていると分析する。

そして最後に「念仏助業論」を挙げて、法然浄土教思想に見られる「仏との関係において見られる人間」と「社会を構成する一員としての人間」を統合する、最要となる立場について論じる。すなわち、「戒法等の道徳的行為も念仏の助業とされるときのみ意義ある行為であって、助業と考えなかったときは無意味であり、まして念仏行をさまたげるものであったなれば、

それは悪業として廃捨されるものである」という。

坪井氏のこの論文は、法然浄土教の人間悪を二分類四方面から分析するものであり、多くの論文が注目する内省的、実存的人間観の指摘のみにとどまらず、社会的、人倫的側面へと考察するものであり、法然浄土教の人間観を基点としながらその倫理性にまで及ぶものであるといえるだろう。

菊藤明道氏の「法然上人の人間観―特にその罪悪性について―」（『印度学仏教学研究』通巻四七、一九七五）は、「罪」「人間悪」「法然の勸戒」を論点として置き、法然の人間観について考察するものである。

まず菊藤氏は、仏教における罪を「法（dharma）に背反する行為、あるいは戒律に反する行為とされる」とし、その根本として痴に注目する。そしてこの痴の断滅の可能性を否定的に捉えたのが法然・親鸞などの浄土教徒であると浄土教の人間把握の特質を指摘する。そして法然に見られる罪悪意識は、あくまで仏教的な罪意識であり、世間的倫理的立場のものではないと述べる。さらに法然が凡夫往生を示しながら勸戒、説戒を行っていたことについて、それは法然の二面性や矛盾ではなく、「止悪作善や戒法遵守を通して、自らの罪悪性、迷妄性をより深く自覚せしめ」るためであったと論ずる。

この菊藤氏の論では、法然における罪の内省が倫理的理念におけるものではなく、「宗教的実存的立場における真実相を示すもの」であり、その「善・悪も単なる社会倫理的意味ではなく、その根底には常に宗教的理念」があるとして、宗教的立場と倫理的立場という区別を想定しつつも、それらを分断したものとではなく、重層的な構造において論じているという点は留意されなければならない。

② 浄土教信仰・思想の中に人間観を捉えるもの

法然の人間観を論究するための資料は、当然法然の言葉、すなわち遺文がその中心となるのであるが、残されている法然の遺文はその信仰の立場から発せられたものがほとんどであり、時系列にそって、信仰の契機として捉えうる人間観を語る言葉は限られている。そうした意味で、「信仰の基盤として人間観を捉える立場」の研究であっても、法然遺文を研究の対象とする限り、そこには「基盤として」ということと「信仰の中に」ということの明確な境界線を引くことは難しい。しかし、浄土仏教信仰の必然性として人間観を捉えるものと、浄土仏教信仰の信仰構造のうちにおいて問題とされる人間という意味で一応の分類はできるだろう。ここでは信仰構造において把握される

人間観の研究について見ていきたい。

石井敎道氏の『浄土の敎義と其敎団』（一九二九）の第三章の衆生論中第一節「浄土行者の資格と其種類」は法然浄土敎の敎学体系における機根論、すなわち人間観について記されたものである。これは、敎学的なものであって人間観研究とはいささか異なる性質のものであるが、法然浄土敎における伝統的人間理解がうかがえる。すなわち、仏敎では伝統的に全ての生物に仏性が有るとする「性宗」と、五性の差別を認め仏性の無い者もあるとする「相宗」の二つの立場があり、浄土宗は前者の立場を取る。また、『無量寿経』第十八願には「唯除五逆誹謗正法」とあるが、善導の解釈によりこれを抑止門と撰取門によつて解釈するため、浄土の法門の対象は十方衆生であるという。そして、浄土敎当面の相手は下劣の凡夫であり、龍樹、天親を初め各祖の一貫した見方であつて、「何の敎えから見捨てられたものが、悉く浄土の法門によつて救われる特色を有する」と述べる。

高橋弘次氏の「法然の人間観——特に「瓦礫變成金」について——」（『印度学仏敎学研究』通巻二九、一九六六）は、『選択集』第三章私釈段に引用される法照の『浄土五会法事讚』の文

「但使廻心多念仏、能令瓦礫變成金」への着目から、法然の人間存在の把握に以下の三つの立場があると指摘する。

A 本質的立場——一切衆生皆悉有仏性

A' 実存的立場——仏性無由顕現

B 本質的立場を無視した実存的立場——能令瓦礫變成金

そして、A、A'の立場は、聖道、浄土の両方の立場において成立する人間観であり、「Bは聖道門に見出し得ない人間観である」と法然の人間観の特異性を論じる。すなわち、Aは人間の本質に仏性を認め、また実践によつてそれが開発されている可能性を認めるものであり、このAに対する消極的態度として、AとBの立場が定立されるのであるが、この二つの立場の違いを、「AとBは同じ実存的立場に立ちながらも、AはAを想定しているのに反し、BはAの立場を想定していないところに両者の相違点が見いだされる」のであるという。というのも、瓦礫と金は質として全く異なるもので、断絶するものだからである。

この「瓦礫」の表現に見られる法然浄土敎の人間観は、仏敎一般の有仏性ということ前提とせず「阿弥陀仏の本願力に人間存在のすべてを託すという他動的な信仰構造の（略）中であつて実際の実践者は、人間性（煩惱）の实体をより鮮やかに自覚すると共に、救済の非をも自覚する」というパラドクснаな信仰構造の課程を経巡ることによつて自覚される「凡夫性」

の独自のものであるという。

清水澄氏の「法然上人の人間観 ―護教論的試論―」（『浄土宗開宗八百年記念 法然上人研究』所収、一九七五）は、法然在世の時代的狀況への考察を踏まえた上で、特に「百四十五箇条問答」に着目し、そこに見られる、混乱する社会情勢においてなおその現実社会に（「呪術的、神仏混淆的祭祀によつて」）解決を図ろうとする人々に対し、直接的・連続的に回答を与えないという法然の姿勢を、法然は当時の大衆に「念仏という鑄型を打ち込んで先ず新しい存在を作り出されたのである」と考察し、その人間観を、「われわれにとつては、上人によつて顕にされた人間の相である」とし、この人間とは念仏者という「阿弥陀仏の光明に攝取された新しい存在」と捉える。ただしこれは「人間が実体としてとらえられている」のではなく、「法然上人にとつて人間は単に念仏者であることではなく、念仏者になることであると云える」という。

法然の浄土教思想がその人間観を基盤とするものであるという予見を抜きにして、法然の法語から人間観を考察したものであると見ることができらるだろう。つまり、法然の浄土教信仰のうちに語られる人間ということであり、よつてそれは、分析的で静的なものとしては捉えられない。

同清水氏の「法然上人とマルチン・ルター ―人間観について―」（『浄土宗開創期の研究』所収、一九七〇）は、法然の浄土教信仰とルターのキリスト教信仰の比較を通して、その人間観の特徴について論究するものである。すなわち、ルターの「ローマ書講義」と法然の「三学非器」の告白には、罪の自覚により救いを求めるという点で対応関係が見られるが、ルターにとつて信仰は全く神に由来するものであり、法然の説く口称念仏は、名号の功德は仏に由来するものの、その行為は凡夫の業である。つまり前者は人間と神が絶対的に断絶するもので、後者は人間と仏の念仏による連続が認められ、両者の人間観は根本的に異なるという。

浄土教とキリスト教は、慈悲と恩寵ないしは愛という点で類似性のみが強調されがちであるが、清水氏のこの論文は、人間観から着目することによつて両者の決定的違いに論究するものであり注目されなければならない。

同じく清水氏の「法然上人の人間観 ―歓喜踊躍の心をめぐつて―」（『法然仏教の研究』所収、一九七五）は、鈴木大拙博士の浄土教の祖師達は口称念仏の心理的効果・心理態を無視しているという指摘を受け、法然の法語から口称念仏の心理態を、特殊な恍惚ではない平常の三心具足による歓喜として分析

する。そして、他の宗教体験の歓喜としてW・ジェームズの著書『宗教経験の諸相』に見られる回心 (conversion) に伴う歓喜、『ヨーガ・ストトラ』およびアヴィラのテレサに見られる神秘階梯における歓喜、菩薩の階位における十地の初地の歓喜という三例を比較の対象として、三心具足の歓喜がそれらに對し特異なものであると論じる。さらにキリスト敎における歓喜の意味内容に論究し、「未來における救いの確かさの信知によつて現在が規定されるけれども、しかしそのことによつて現在が撥無されることはない。寧ろかかる人間的現実が、絶對的威力の下で最後の時に到まで現実の次元において自らを深めていく」という点から法然上人の人間觀との相似性を指摘する。そして、こうした心理態を有する法然の人間觀を、「何の熱狂もなく冷静に醒めている、何の誇張もなく謙虚で、何の濁りもなく透明で現実的な」ものであると結論する。

この論文はキリスト敎との同異という点に関しては、前出論文と異なる結論となっているが、これは論点の違い（神・仏一人、歓喜踊躍の心）によるものであつて、むしろキリスト敎と浄土仏敎を立体的に見る契機ともなるだろう。

服部正穩氏の著、『法然浄土敎思想 ― 法語の分類を中心として―』（一九八〇）の第三章は、「人間觀」と題され、法然の

法語から人間觀に関わる表現を収集・分類し、考察を加えるものである。服部氏はまず、仏敎の人間觀が「自力聖道門の人間觀（仏性を顕在化できる）」と「他力浄土門の人間觀（他力に依らねば悟れない）」の二類に大別できるとし、「後者は前者を前提とし、さらに自己省察を深めた結果生じた人間觀であると考えられる」とする。さらにこの他力浄土門の人間觀における人間は、「自力聖道門の人間觀からは排除され、人格を失つた人間であるが、それがその枠を超えて人間として認められ、受け入れられていく人間であり、その意味で他力浄土門の人間觀は自力聖道門の人間觀を超えたものである」として、この他力浄土門の人間觀を法然の人間觀の典型であると概括する。このように法然の人間觀を押さえた上で、その特徴をもっともよく表現するものとして「凡夫性」に着目し、法然の凡夫性に言及する法語を次のように分類する。

凡夫性

凡夫性自覺の過程―三字非器

凡夫と聖者（凡夫は聖者に対する）

煩惱罪惡の凡夫 罪惡生死の凡夫

煩惱具足の凡夫

煩惱罪惡の凡夫

常没流轉の凡夫

乱想妄念の凡夫

愚痴無智の凡夫

また、凡夫性の自覚の根源にあるものとしての仏性と、往生してさとりを得るということの前提となる仏性は認められる点、そして女人往生を認めるということが指摘される。

以上のような分類・分析から服部氏は、法然の人間観を単なる凡夫による世俗的道徳的反省ではなく、「より高次な宗教的省察」によるもので、「それは実存的人間観」であるといい、法然浄土教は「宗教的真実に照らされた現実の人間に上人は凡夫性を発見した」論じる。

藤本浄彦氏は、二〇〇三年に『法然浄土教の宗教思想』を上梓しているが、この第二部第一章は「法然における浄土教的存在論の形成」と題され、法然浄土教における人間存在およびそれを起点として法然浄土教について論じるものである。特に注目すべきは、藤本氏が宗教の現代的問題を人間存在の問題と定め法然浄土教を解釈する点である。この存在論という問題意識から、善導から法然への展開を解釈し、指方立相、『選択集』へと考察を広げ、再び法然浄土教の人間存在について論究する。すなわち、「法然浄土教の凡夫」とは、今、此処に、実存として在る状況としての凡夫（三学非器）であり、「三学非器で

あるが故に、法然の仏道は「有縁法・有縁行」という「人間実存の次元では不可能な「存在の逆説」であると捉える。そしてこのように「存在すること」の問題を、有縁とか、機縁」といわれる地平においてとらえ直すところに、凡夫という用語の法然的意味があり、今日的課題へと通じる」といい、また指方立相において「報身の阿弥陀仏を強調し称名念仏の実践を「ただ一向」にすすめる法然の教えの根元には、存在の超越的ダイナミズムから生じる有相性と呼応性の人間学が脈打っている」とし、「報身」の阿弥陀仏観、「彼此三業不相捨離」の呼応的世界構造、「五番相對」の行的着想、「万徳所歸」の名号観、「平等往生」の本願観、「念声是一」の称名念仏理解」は、こうした「有相性と呼応性」を含む「存在の問い」から湧出するものであると論じる。

藤本氏同著の「宗教的人間観の形成」（第四部第一章第三節）は、法然とキェルケゴールの宗教思想の比較、特に両者の人間実存の把握からその信仰構造（我―汝）を分析することによって、個別的な宗教（浄土教とキリスト教）の根底にある「信仰に基づく人間観」の普遍性へと論究している。この論文では、善導の『観経疏』に説かれ、選択集に引用される三心における二種深心が着目され、これがキェルケゴールの「質の弁

証法」、すなわち「人間実存がその可能性を欠くところに来てくると、それは絶望の状態にある」↓「人間がもはや救いの可能性を発見しえない場合にのみ、信じるということがありうる」↓「自己の本質が根底から揺り動かされ、その結果、自己が精神となり、いっさいが可能であることを理解した人にしてはじめて、神との関係に入った人であると言える」という展開的構造と対応する、「行の弁証法」であり「称名念仏を通して無限に循環して生成するという特徴を持つ」と論じる。善導・法然が説く三縁中の親縁に見られる身・口・意の三業による阿弥陀仏への関わりという在り方について、キエルケゴールの『信仰の定義』、「自己が自己自身に関係しながら自己自身であろうと欲するとき、自己はこの自己を置いた力のうちに、はつきりと自己自身の根拠を見出す」というのに対し、法然の称名念仏の特徴として、「全人格的に宗教的人間観の形成に密着している」ということを指摘している。

これらの考察を通して藤本氏が主張する、「単に「神」や「仏」の概念を固着的に扱って差異を模索するのではなくして、人間との関係における構造の中で極めて具体的に「人間観」と「信仰構造」の問題として考察することが重要」であるという指摘は注目されねばならない。

③ 全体にわたるもの

これまで、法然浄土敎思想の基礎としての人間観研究（通敎的背景から論じるもの・思想的立場あるいは浄土敎史から位置づけ・実存的人間観）と、法然浄土敎の信仰の直中における人間観を論ずるものに大別して概観してきたが、最後に、これらの分類に明らかに分けられない、複合的に論じるものとして、大北裕生氏の論文を見ておきたい。

大北裕生氏の「法然上人の人間観」（『人文学論集』第五号、一九七一）はまず、法然以前の日本仏敎史における凡夫観として最澄・源信・永観を挙げながら、法然以前において、自己及び人間全般の凡夫性への自覚は見られるものの、依然法然の鋭さには達していないという。そして、法然遺文の分析から、その人間観を「現実の無明煩惱から一步として出離し解脱し得られないものであるという自覚に立つ」として、この無明煩惱を『菩薩瓔珞本業経』『大乘義章』『大乘起信論』を典拠に、「無明こそが実存としての人間の本質構造そのもの」であると論じる。こうした人間観は「三学非器」の自己省察や、「十悪の法然房、愚痴の法然房」の述懐からも読みとれるといい、またこの人間の根元への洞察は、「絶対者である仏の前に立った自分自身に対する内省であり、仏の光に照らし出された自分自身について

の告白でもある」と論じる。またこうした人間観に立ちながら、仏性の問題について道緯・善導の記述を引き、「人間は本質的には仏性を有する存在でありながら、主体的な実践の場にあつては、自己の力によってそれを開顕することの不可能なることを示し、未来の仏性を肯定」、つまり往生浄土の後に開顕される仏性を認めているという。このように日本仏教史における法然の凡夫観の位置づけと無明煩惱の分析、またこの人間観と仏性の関係について論じた上で、法然の人間観を「法然において人間とは何かという問題は、単なる論理や観念の問題ではなく、自己自身の生を賭する問題として、宗教的実践の只中であつて、その中にみられる赤裸々な人間存在を捉えようとするものである」と結論している。

おわりに

以上、これまでの法然の人間観研究について、分類・整理しながら見てきた。見てきたとおり、法然の人間観研究は、通仏教的知識を背景とした哲学的世界観からの位置づけや煩惱の分析を行ないその人間の位置づけを行うもの、思想的立場から法然にいたる深まりや先鋭化を論じるもの、また研究者が主体的に人間を考察し、法然の人間観と突き合わせて論じるものと

いう類が見られた。これらは、浄土教信仰へ至る前提としての人間観を論じるものとして、法然仏教の教義基盤としての人間観に論究するものと位置づけることができる。また、法然遺文を基礎資料として、その教義教学のうちに見られる人間観について論じる、あるいは教義の実践その中に生成していく人間観を論じるものが見られ、これらは浄土仏教信仰・思想の中に人間観を捉えるものとして位置づけられる。さらに、今述べてきた立場・方法論を複合的に用いて一つの論とするものも見られた。今後は、これらの研究成果の相違点を抽出し、その問題点を議論することが課題となるだろう。

この課題の端緒として、初めに挙げた峰島氏の論文の問題について触れておきたい。先に述べたように、その問題点の第一は、善導・法然の浄土教の人間観が人間一般について考えるものではないという点である。これに対する反論としては、奈良氏が歴史的背景の考察から、法然の人間観は時代的苦悩を背景としたものであるとしていること、また結城氏、大北氏が浄土仏教の人間観から煩惱の考察により、人間存在が構造として無明を本質とするという研究が挙げられる。また、坪井氏は聖道門に対して浄土門の人間(凡夫)観は主体的である(一九五三)とするが、しかし仏の前にあつてはすべての人間は悪人であるという見方も提示している(一九六八)。してみると、浄土教

の人間観は、特に法然においては、自身の深い省察を契機とするものであっても、そこには人間一般の問題とされるべき要素があるとすべきではないか。

また、峰島氏は悪人正機の問題として、これが普通日常で言うところの善悪ではないとしており、これに賛同すると見られる研究に、法然の人間（凡夫）観は世俗的・道徳的反省ではなく、より高次な宗教的省察によるものとする服部氏のものが見られる。しかし、菊藤氏の研究によれば、法然の罪意識は仏教的なものであつて世間的倫理的立場ではないとしながらも、宗教的立場と倫理的立場の重層性を指摘しており、また、西川氏は法然の善悪は世間の道徳と同意であるとしている。こうした問題は宗教倫理や宗教言語の議論にも及ぶものであり、更なる研究が必要となるだろう。

この他に、これまでの研究を振り返りながら考察すべきでありながら指摘しえなかつた問題も多くあるように思われる。また、見るべきでありながら取りこぼしている研究も少なくはないだろう。今後はそういった点を補完しながら作業を進めていきたい。

（いちかわ さだたか 嘱託研究員）

二〇〇九年十一月二十五日受理

〈Summary〉

Retrospective Research on the Anthropology of Hōnen's Pure Land Buddhism

ICHIKAWA Sadataka

This research note collects and classifies past studies on the anthropology of Hōnen's Pure Land Buddhism. Although it is not possible to make clear partitions, the studies can be divided into the following categories;

1. Anthropology as the base of Hōnen's theology
 - a) Studies of general Buddhist knowledge
 - b) Studies of (Pure Land) Buddhist history
 - c) Studies of existential concern
2. Religious anthropology within Pure Land faith / thought
3. Synthetic study

This note argues that there are several collisions, rather than consensus, on the subject, and indicates the necessity of further argument.

Key words: Honen's Buddhism, Pure Land Buddhism, Anthropology, Sinner's Salvation

